



ふるさと見て歩き

疱瘡の神様



▲瘡守稲荷神社（大岩下郷）

大岩下郷集落には地元の子氏十五軒で守っている「瘡守稲荷神社」という小さな神社があります。聞きなれない名前の神社ですが、病と闘ってきた人々の願いの込められた神社なのです。

◇疱瘡という病

疱瘡という病をご存知でしょうか。痘瘡、天然痘とも言われる感染症で現在は撲滅宣言が出されていますが、江戸時代までは多くの人が一生に一度はかかる病でした。発熱し、体中にぶつぶつと発疹が現れ、掻くとあばたになつて跡が残るため、よく「疱瘡の見目さだめ、はしかの命さだめ」などと言われました。顔にあばたが残ることが嫌がられた病気ですが、子どもがかかると命にもかかわる危険な病気だつ

たのです。

ようやく幕末頃から「種痘」という免疫療法が輸入され広がり始めました。疱瘡ははしかと同じように一度かれば二度とかわらないことが知られており、この性質を生かして、弱いウイルスを皮膚に接種し、免疫を作るといったものでした。

ではそれ以前は？

対処法がないので神仏へ祈るしかありません。疱瘡神を祀ることで瘡にかからないよう、またかかっても軽く済むように願ったのです。その代表的な神社が瘡守神社で、「笠森神社」と字が当てられることもあります。東京谷中の笠森稲荷神社は美人画の「笠森おせん」とともに有名です。

大岩下郷集落には市内唯一の瘡守稲荷神社があります。昔はできものを「くさ」などと言ったため、「くさつぽの神様」と呼ばれ、できものができると土だんごを丸めて供え、治癒を願ったといえます。今は地元の人々から「お稲荷さん」として親しまれているため、もともと疱瘡やできものの神様であったことを知る人は少なくなりました。

毎年二月の初午と十一月十二日のお祭には赤飯、油揚げ、ツムジツカエリ（スミツカレ）茨城県西部・栃木県の郷土料理で鮭の頭を煮込んだものに粗くおろした大根・人参・酒粕・油揚げなどを刻んで入れ、長時間煮込んだものをお供えし、氏子たちは神社下の個人宅でお茶飲みをして解散します。この神社の社殿はワラホウデンで、十一月のお祭でその年の当番が注連縄とともに造り替えています。写真のように瘡守稲荷神社、大山祇神社、熊野神社の三社が並んだワラホウデンを造ります。

◇疱瘡神の詫び証文

種痘という予防医学が広まる前には護符や呪いなどの「神頼み」が唯一の方法でした。疱瘡をもたらす疫神は赤色を嫌がるとされ、赤い色の呪符や玩具、疱瘡神を退治し



▲瘡瘡神の詫び証文（大町昌寿家文書）

ます。疱瘡を軽く済ませて成長してもらいたいという親たちの切なる願いが伝わってくるものです。
※吉村一氏に聞き取り調査に御協力いただきました。
（歴史民俗資料館）

たとされる源為朝の絵札を掲げるなど様々なことが行われました。中でも興味深いのは「瘡瘡神の詫び証文」と称される証文が時々発見されることです。これは栃木県や茨城県の南西部を中心に関東地方に特徴的にみられるもので、市内でも見受けられます。

五名の瘡瘡神から、瘡瘡除けの力があるとされる「若狭小浜六郎左衛門」あるいは「仁賀保金七郎」「鎮西八郎」（源為朝のこと）等宛に、瘡瘡を流行らせた悪事を反省し、六郎左衛門らの名の記された家には決して入らないことを誓う旨が書かれたもので、護符の役割を果たしていました。自分で書き写したり、行者のような人物が販売したりして広まったようです。おそらく家の門口に貼ったり神棚に置かれたりしたものでしょう。文書の中に瘡瘡に罹った子どもの名が書かれることもあり